

令和2年度第1回 感染症発生動向調査部会  
議事要旨

1 日 時 令和2年9月16日（水） 14:00～

2 場 所 岐阜大学医学部本館 1階 入札室（岐阜市柳戸1-1）

3 出席者

委 員 : 馬場 尚志（岐阜大学医学部附属病院 生体支援センター センター長）  
大西 秀典（岐阜大学医学部附属病院 小児科 准教授）  
澤田 明（岐阜大学医学部附属病院 眼科 講師）  
加藤 達雄（国立病院機構長良医療センター 呼吸器内科統括診療部長）  
石山 俊次（石山泌尿器科皮膚科）  
事 務 局 : 村瀬 真子（感染症対策推進課 感染症対策監）  
石塚 敏幸（感染症対策推進課 感染症対策第二係長）  
山田 涼子（感染症対策推進課 技師）  
今尾 幸穂（保健環境研究所 疫学情報部長）  
岡 隆史（保健環境研究所 主任専門研究員）

4 議 題 （進行：馬場委員）

- (1) 前月の感染症発生動向について
- (2) 検討すべき課題について
- (3) 情報提供すべき事項について
- (4) 情報提供（月番委員専門分野から）
- (5) その他

5 議事要旨

【前月の感染症発生動向について】

- ・事務局からの説明は資料のとおり。
- ・月番委員のコメントについては資料のとおり。

【検討すべき課題について】

○現在みられている減少要因の分析・解釈について

- ・ 本年の発生動向をみると、全数及び定点把握対象となっている多く感染症にて報告数が著しく減少しており、例年になく特殊な状況と考えられる。その原因として、新型コロナウイルス感染症への対策に伴う行動変容などが考えられるが、医療機関への受診控えのほか医療機関での検査控えなどの用意も考えられる。また、年齢などを詳細に検討すれば休園・休校などによる効果・影響も推察できる可能性もある、各種感染症が著しく減少している現状のデータをより深く分析し、その原因を分析する

ことは、今後の感染症対策全般に重要な知見になると期待される。

(委員からのコメント)

- ・ 疾患によっては発生数が前年と大きく変わらないものもある。その理由としては感染経路の違いが考えられる。飛沫感染や経口感染による感染症は減少している一方、結核のように再燃により発病する病態や性感染症には大きな変化がみられない。また、突発性発疹も昨年度と大きく変わっていないが、主に乳児期の家族内感染と推察されており、社会における新型コロナウイルス感染症対策の影響をあまり受けないと考えられる。
- ・ 外来診療の現場で受ける印象としては、受診控えや検査控えによって報告数が減少しているとは考えにくい。
- ・ 腸管出血性大腸菌感染症などは消化管感染症が今年度減少しているのは、外食の機会が減少したことなども影響している可能性がある。
- ・ 侵襲性インフルエンザ菌感染症は大きく増加しているように見えるが、1月から3月の間の報告数が多く、1月の時点で既に昨年度の発生数を超えていた。その後の発生数について新型コロナウイルス感染症対策の開始の影響を受けているか検証を行う必要があるとも考えられる。
- ・ 梅毒などの性感染症については、今年度大きな減少傾向がみられない。性感染症のリスク集団は、新型コロナウイルス感染症対策に伴う行動変容の影響を受けにくい年齢・背景を持つことが考えられる。

#### 【情報提供すべき事項について】

(馬場委員)

- ・ 新型コロナウイルス感染症関連の情報について
- ・ 保健行政における組織改変
- ・ 行政検査や保健環境研究所の役割について
- ・ 新型コロナウイルス感染症以外の感染症動向・予防・注意点について（上記の分析結果をもとに）
- ・ 今冬のインフルエンザ対策について

#### 【情報提供（月番委員専門分野から）】

(馬場委員)

- ・ 様々な遺伝子検査の体外診断用医薬品としての認可について
- ・ 10月の定期接種実施要領の改正について

#### 【感染症対策推進課から情報提供】

(感染症対策推進課)

- ・ 次のインフルエンザ流行に備えた体制整備について
- ・ インフルエンザワクチンの優先的な接種対象者への呼びかけの実施等に関する検討状況について
- ・ 異なるワクチンの接種間隔の見直しについて
- ・ 季節性インフルエンザワクチンの供給通知発出について

(保健環境研究所)

- ・ 行政検査や保健環境研究所の役割について